



あたらしい時代の「学び方」

○社会科の授業で生まれた「対立」

令和二年の新春を迎えました。退職後、十五回目の新年です。この間、私は非常勤講師として、初任者指導と社会科専科に携わってきました。この経験を通して私は、「子どもにとって楽しい。考えを出し合うことで、どんどん学びを深めていくな」と思うことが何度もありました。今回はその中の一つを取り上げてみます。

四年生の社会科「郷土の開発」の後、ふつうならまとめとなる授業ですが、まずはこの単元の導入から振り返ります。

授業では、江戸時代、内海を埋め立てて田んぼを完成させた開発を取り上げ、それがどのような埋め立てだったのかを調べました。このとき、Aさんが唐突に、「どうして埋め立てなんかするのだろう。自然を大切にすればいい

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子

のに」と叫びました。これには多くの子どもが反発し、「え〜! Aさんは人々が貧しいままでいいって言うの?」「みんな稲作をしたかったんだよ」「人々は豊かになりましたかと思う」と口々に発言しました。私はこのやり取りをうけ、子どもたちに「おもしろい。今の、みんなの意見の対立を解決するのは、単元の最後までとっておこう。学習が終わるとき、今の思いは変わるかな。それとも変わらないかな。楽しみにしているよ」と言いました。

○話し合いの行方を決めた「うちうち」という考え方

授業はこの埋め立てを中心に、江戸時代以降の明治、大正、昭和の開発に触れ、いよいよ終末を迎えました。そして、冒頭からのテーマである、「これから開発を続けるべきか、それより緑を大切にすべきか」を話し合うことになりました。

話し合いは、「開発は人々の生活を便利で豊かにする。だから江戸時代に限らず大切にしないといけないし、これからもしっていくべきだ」という意見と「今は緑を守らないと地球の温暖化が進んでしまう。これからは開発を抑え、緑を守らないといけない」という、二つの意見が対立しました。もともと、「両方大事だ。悩む。困った」という子も

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

少ししました。

話し合いは活発に進みました。自分の信念に燃えている様子の子ども、自分の意見に確信がもてずに不安げに発言する子ども、どちらの考えがよいか慎重に確かめようと首をかしげる子ども、それぞれの意見に「うん、うん」とうなずく子どもなど様々でした。そんな中、冒頭で「開発なんかしなければいいの」と言ったAさんは、友達の発言に無言で耳を傾けていました。

話し合いが喧々諤々けんけんがくがくになったとき、Bさんが発言しました。

「どちらの意見が正しいのか困っている子もいるようだけれど、どちらも大事だと私は思う。だから、開発するところと緑を守るところを決めて、守るところでは建物を建てないようにすればいい」。

私はBさんの発言を絶賛するとともに、放課後、初任者のC先生に、その意味、価値を話しました。要約すると、次のとおりです。

私は対立が一段落ついたら、次のように投げかけるつもりでした。「開発を続けながら、緑も大事にする方法はないかな」。

しかし、その必要はなくなりました。Bさんの発言のおかげで、学習が深まっていったからです。

指導案ではこれら一連の展開を、「活

動の1、2」などと書きますが、それは担任の発問によるものです。しかし、ここではBさんがその役割を果たしています。まさに、子ども主体の授業と言っているでしょう。

Bさんの発言によって、子どもたちの発言はガラッと変わりました。意見を対立させることから一歩進んで、折衷的な考えを出し合うようになったのです。さらに、「建物を高層ビルにすれば、空いた土地ができるから、そこを緑にすればいい」「建物を建てるときは、同時に公園など、緑も大事にする」という二つの意見が出て、話し合いがまとまりました。

このように、子ども主体の授業は、子どもたち自らで学びを深め合っていきます。Bさんのすばらしい発言にしても、もし一人で思いを巡らせるだけなら、あのような内容にはならなかったかもしれませぬ。友達の発言を聞きながら、自らの考えを深めたりひらめかせたりしているからこそ、皆が納得するような意見が生まれるのでしよう。

「開発も緑も」といった子どもたちの発言三つはいずれも今、日本の都市が実際に取り組んでいることです。また、私はこの授業でのAさんに注目したのですが、改めて意見を聞くと、「江戸時代なら開発がいい。豊かになってほ

しいから。でも今は、やっぱりだめ。緑を守ってほしい」と発言しました。

○学校で学ぶことの意味とは

よく「学校で学んだことは、社会に出たら役に立たない」と言われます。確かに、単に知識を習得するだけなら、これは当たっているでしょう。しかし、本授業に見られるような学びは、単なる知識の習得ではなく、人としての学び方、生き方に響いていくものであり、社会に出ても立派に通用する力になるのではないのでしょうか。

こうした授業は学級内の人間関係を豊かにします。「なるほどね」「あ。そうか。今のDさんの発言でわかったよ」と、相手の考えを理解し、お互いに尊重し合う空気が生まれてくるからです。そして、「正解もいろいろあっていい」と、子どもたちの視野が広がっていきます。

それこそ、一人ひとりの胸の裡うらみにある「学び」となっていくでしょう。

